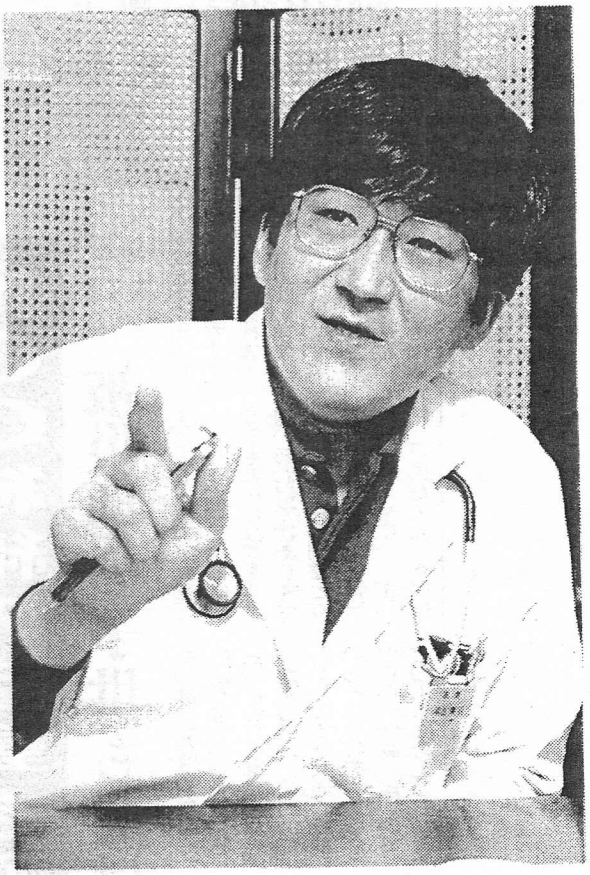
夢紡人［ゆめつむぎびと］⑧

医療救援活動で世界を飛び回る熱血医師・津曲兼司さん

「人間が好きです。だから、まっさきに飛び込むんです」
アジアを中心に世界各地へ飛び、医療救援活動を展開するAMDA（アジア医師連絡協議会）の事務局次長。
阪神大震災でも、最初に駆けつけた医療チームのリーダーだった。

文・和田紀元（広島県広島市在住）
写真・藤原嵩士（ふじわらたかお）（広島県広島市在住）



自ら波乱に身を投ずる

波瀾万丈という言葉があり、多くの場合、運命に弄ばれる人を形容するが、津曲兼司（つまがりけんじ）さん（39歳）は、同じ波瀾万丈でも、まったく異なっている。求めて波乱の海に乗り出し、極言すればそれを生きがいにしている風なところがある。

一九七八（昭和五三）年、津曲さんは東京外国語大学を二年で中退した。

「何か、違う道があるのではないか。そう思ったのです」

ありきたりのレールの上を行くのをやめた彼は、世界を自分の目で見てやろうと心に決める。

アルバイトに精を出し、旅費稼ぎをするのだが、ちょうどその頃、アフリカ協会がアフリカへの留学生を募集していた。これだ、と膝を叩いた彼は早速応募した。論文、面接を含む一次、二次試験があり、一三倍の競争率だったのに、自分で受かると決めてしまう。

アルバイトを辞め、出発の準備をしていた彼の元に届いたのは「今回はご希望に添えません」という手紙だった。困った。結局はあとで補欠の繰り上げでアフリカ行きが実現するのだが、このあたり、風雲児は相当の自信家でもあるようだ。

つまがり・けんじ
1956年千葉県松戸市に生まれる。1979年東京外国語大学中退後、ケニヤに留学。1983年秋田大学医学部入学。1989年医学部卒業とともにAMDAに入会。1992年より岡山市のアスカ会菅波内科医院に勤務するかたわら、AMDA事務局次長を務めている。

「ネットワークづくりがボランティア活動の基本です」国内・海外での人の輪づくりも、津曲さんの重要なテーマ（AMDA本部で）

人間に役立つ技術が欲しい

さて、一九七九（昭和五四）年四月に渡ったアフリカ・ケニアでは、星野芳樹（ほしのよしき）という傑物に出会った。世界を放浪の末、三〇年もケニアに住んでいた人で、民間外交官のような存在。日本から多くの青年を招き、学ばせていた。その星野氏のもとで、津曲青年はアフリカ言語を学び、現地の人々の中に入って生活した。そして、カルチャーショックを受けることになる。

「彼らのあけっぴろげな態度、ぜいたくに時間を使う生活にほれました。自分の中にあった心のフレームが壊れていく。この快感がたまりませんでしたね」

アフリカで生きよう、アフリカ人の中に入っておおらかに暮らそう。そう思ったとき、また一つ波乱を自らに呼び起こす。自分には、海外青年協力隊の人たちのように、アフリカの人たちに貢献する農業や車の技術がない。それを身につけなくてはならないと決意した彼は、日本に帰った。

大阪外国語大学を経て一九八三（昭和五八）年、秋田大学医学部に入学。その理由がふるっている。

「人間が好きなのです。その人間にいちばん近い"技術"は医学だと思いました」

人生を変えたAMDAとの出会い

津曲さんは、秋田大学医学部で、AMSA（アジア医学生連絡協議会）の活動と出会う。AMSAは現在のAMDAの兄弟組織のような存在で、各大学に支部があり、当時、秋田大学には熱帯医療研究会が設けられていた。

このAMSAの活動には伏線がある。それは、AMDAの前身の一つである「西日本アジア医学生連絡協議会」が一九七九（昭和五四）年に行なったカンボジア難民キャンプでの医療救援活動である。現在AMDAの代表である菅波茂（すがなみしげる）医師と医学生二人は、カンボジアの内戦で傷ついた人々を医療救援しようと勇んで出かけたが、先方に受け皿がないことや現地の伝統医療、とりわけ熱帯医療についての知識がないなどから、ほとんど本格的な活動ができなかった。その手痛い経験から、将来の本格的な国際ボランティア医療活動を目指し、アジア各国にネットワークをつくろうと発足したものだ。

彼はこの活動を通じて毎年アジア各国へ出かけていくことになる。一九八九（平成元）年、AMDAに入会。知り合った菅波医師の誘いもあって、一九九二（平成四）年、岡山市のアスカ会菅波内科医院に勤務し（現在副院長）、同医院にあるAMDA本部では事務局次長を務めている。

プロジェクトの必殺打ち上げ人

ミャンマー難民救援医療のためバングラデシュへ。ソマリア難民プロジェクトのためソマリア、ジブチ、ケニアへ。モザンビークプロジェクトのため準備訪問。ルワンダ難民政府調査団としてルワンダ、ザイールへ。

AMDAでの津曲さんの海外への医療救援はひきもきらない。このあたりになると、当然、波乱を求めたかつての人生と少し違

＊AMDA（アジア医師連絡協議会）は、アジア15か国に支部をもつNGO（非政府組織）である。日本には、医師をはじめとした約400名の会員がおり、会費やボランティア活動助成金などで運営されている。
☎086（284）7730

う。AMDA代表で、アスカ会菅波内科医院院長の菅波さんは津曲医師のことを「緊急救援プロジェクト必殺打ち上げ人」と呼んでいる。

「すぐ飛び出していく人間だからでしょうかね（笑い）。救援医療は、他のNGO（民間救援組織）や国連、政府との連絡、物資の輸送の確立など無数のことを仕上げていかなければ立ち上がれません。そのプロジェクトのプロなのですよ（笑い）」

阪神大震災でも最初に駆けつけた

そうしたAMDAの活動ぶりが、国内で発揮されたのが、このたびの阪神大震災だった。地震発生が報じられるや、医薬品、器材、寝袋、食料を積み込んで二台の車で出発し、その日のうちに現地で診察を開始した。日本にNGO多しと言えども最初に現地入りした医療チームである。多くの医療チームが翌々日の到着を余儀なくされたことを思うと、驚異的だ。

「海外での経験を踏まえて、とにかく飛び出すこと。現地に早く入ることが大事だと思いましたね。つねに連絡を保って、医薬品などの後方支援体制を確立することも重要です」

津曲さんをはじめとするAMDAの活動は全国の組織、支援者によって熱心にスムーズに行なわれ、現地の被災者から感謝された。

「ありがとう、ありがとうと、頭を下げられました。たくさんの被災者の皆さんから。しかし、私は思いましたね。本当に感謝しなければならないのは、私たちではないだろうかと。自分が必要とされている現場に身を置いている。自分の能力や情熱を発揮できる場がある。これは、私たちにとって何よりの幸せではないか」

波乱を呼ぶ男は、外へ、世界へと向かっていた目を、いま自分の内側に向けているかのようである。

ところで、AMDAの本部はなぜ岡山にあるのだろうか。

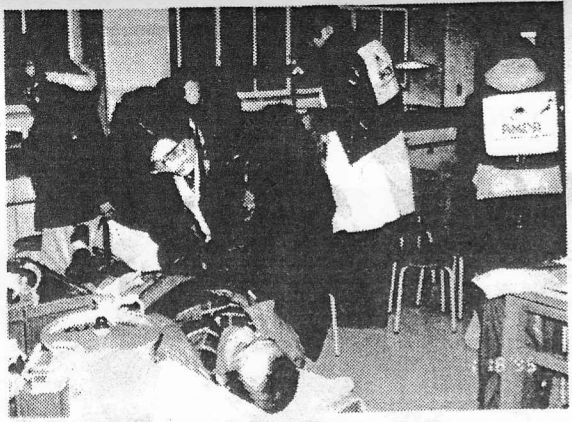
「東京で、ごく限られた人たちが活動するのでは意味がありません。私たちはごく普通の人たちの、地に足をつけたNGOを目指すのです」

思うに、医療、教育、宗教など、岡山には「人間大好き」の風土があるのだろう。ちなみに、一九九三（平成五）年のソマリアのプロジェクトでは、地元の岡山県加茂川町が役場をあげて参加している。

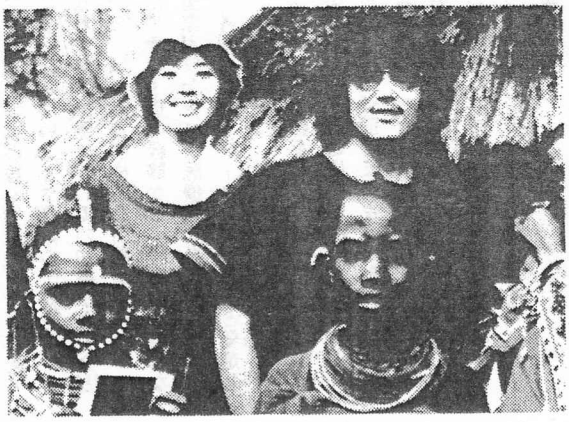
恩人を三人あげるとすればどなたですかという不躾な質問に、AMDAの活動に誘った菅波院長、アフリカで大きな世界を見せてくれた星野さんをあげ、そして、

「母です。アフリカへの留学の際、さすがの僕も臆したとき、男が一度決めたことをなんだ、と一喝されました」

波瀾万丈を育てたそのお母さん、いま東京で病の床についている。取材が終わったら見舞いに行くと、津曲医師、はにかみながら語った。



阪神大震災の現場に最初に到着し、救援医療をする津曲さん。写真右下の日付が、震災日翌日の1月18日になっている。（写真提供：AMDA）



アフリカ留学時代の津曲さん。「ゆったり生きるアフリカの人たちを見ていると、人間の生き方を深く考えさせられました」。左写真の津曲さんの隣りの女性は、テレビ取材で一緒になった女優の岸ユキさん（写真提供：AMDA）

わだ・のりもと
コピーライター。1941年広島県広島市に生まれる。舟入高校、早稲田大学文学部を卒業し、各種広告、PR誌を手懸ける。共著に「アンチ巨人読本」「続アンチ巨人読本」などがある。